

A. Kertesz (著)

横山 巖 神奈川県総合リハビリテーション
センター 七沢病院長 (監訳)
河内十郎 東京大学教養学部助教授

失語症と関連障害

— 基礎・数量分類・病巣局在・回復過程 —

永江和久 (九州労災病院神経内科部長)

日本の失語症学は近年、急速な進歩を遂げ学際的な盛り上りをみせている。このエポックメイキングな時期に「失語症と関連障害」が日本語に翻訳されたことはきわめて意義あることである。本書については原著に接した方も少なくないと思うが、私も原著に目を通す機会があり、是非、日本語訳が欲しいとねがっていた。

翻訳を担当された七沢病院言語科のスタッフは地道で詳細な症例の観察を特徴とし、臨床と研究のレベルは学会で高い評価を受けておられる。また、監訳の横山巖先生、河内十郎先生はリハビリテーション医学ならびに心理学において第一人者であることには言をまたない。

本書は以下の16章より構成されている。すなわち、失語症の分類、各種の失語症検査：紹介と比較検討、WAB (Western Aphasia Battery—

著者らによる失語症検査法)の理論的根拠、失語指数：失語群、対照群、標準化と妥当性、数量分類学、WABを基礎とした数量分析学による失語症者のクラスター化、脳卒中急性期および慢性期の失語症の分類、剖検、刺激、外科手術、血管写、脳波による損傷部位の局在定位、アイソトープによる失語の損傷部位の局在定位、失語症のCT、失読症、失書、失算とゲルストマン症候群、失行症、知能と失語症、失語症の回復と訓練、関連障害の回復、である。他に219篇の文献、239の用語解説とWABの日本語訳が載せられており、WABの日本語訳はこのまま臨床に使用できる。

本書で用いられた症例は失語指数の標準化のために150例、クラスター化のために200例、アイソトープスキャンによる局在定位に脳損65例、CTスキャンの研究には188例

(中103例は色々な理由で除外)であり、これら精選された失語症例とともに対照として脳損傷非失語例、正常者などが用いられている。

本書を通読してまず感じたことは、失語症状の定量的評価、分類の客観化、損傷部位と変動または変遷する症状との関係をどう考えるかなど臨床家が常に問題を感じている課題に真正面から取り組み、実際面から解答を得ようとする著者らの努力であった。本書の他に類をみない特徴は、失語症学に数量分類学を導入したことであり、従来の主観に流れやすい失語症分類を客観化し、失語症状を定量的に評価する基を与えたことであろう。本書に示されている数量分類学による失語症者のクラスター化は病因、経過、回復、訓練効果などを客観的にとらえる定性的評価法であり、失語指数は定量的評価法である。

本書はまた失語症学のテキストブックとしても、偏りなく、標準的で判りやすく書かれている。初めて失語症を学ぼうとする初心者が読んでも決して難解ではない。以上、本書は日常診療に当たっている臨床家にとって幅広い知識を提供するとともに、将来失語症の研究を志す若い学究に良き針路を与える名著であると信じている。

(B5, 頁276, 図90・写真12, 1982, ¥7,200, 千300, 医学書院 刊)